

命がつながれる瞬間

山形県寒河江市立陵南中学校

一年 亀屋 采里

私は四年前、とても貴重な体験をしました。それは何かと言うと、一番下の妹が生まれて来る場面に立ち会ったことです。

四年前の六月。母に、

「赤ちゃんができたよ。」

と言われました。まさか自分が二人の妹のお姉ちゃんになれるとは思っていなかったのですごくうれしかったのと同時に、少しの不安を感じたことを思い出します。

それから八カ月後の二月、小学二年生だった私は、学校で午前中の授業を受けている時、保健の先生に呼び出され、

「お母さん、赤ちゃん生まれるから、すぐ帰りなさい。」

と言われました。急に言われたこともあり、手が震えて、心臓がドキドキしていたことを今でもよく覚えています。

二月の雪がたくさん降っていてとても寒い日でした。家に帰ると、朝は元気だった母が、見たこともないとても冷静な顔になって、陣痛に耐えています。母が働いていた済生館につくと、母はすぐ入院し陣痛室にいきました。母の顔からは笑顔が消え、

陣痛が来るたびに苦しそうな顔をしていて、かわいそうで見えられませんでした。

どんどん強くなってくる陣痛。母は、とうとう分娩室へ向かいました。いよいよ赤ちゃんが生まれてくるのかと、信じられない気持ちと、どんな場面になるのかという正直怖い思いと、母と赤ちゃんにがんばってほしいという思い、たくさん思いが、一気に頭の中を駆け巡りました。私は泣きそうになりながら、痛みに耐えている母の手をずっと握っていました。母は陣痛がくるたびに、母の手に力が入り、握っていた私の手の指の骨が折れそうなほどでした。周りにいた妹や父は

「がんばれ！ お母さん！」と声をかけ続けるのが精いっぱいでした。

二月一日、午後二時十分。元気な泣き声を響かせて、妹は無事に生まれてきました。私は父と一緒に、へその緒を切りました。

十カ月の間、母と赤ちゃんをつないでいた命綱。そのしっかりとした硬さと感触を、今でもこの手で覚えています。

生命が誕生するその瞬間に立ち会うことができ、さらにへその緒を切るという、人生で一生に一度しかないであろう貴重な体験をすることができました。その貴重な体験を通して私は、命の大切さ、かけがえないものだということを肌で感じる事ができました。

今、私の母は助産師です。何百人もの赤ちゃんを取り上げてきました。毎日たくさん勉強したと言っていました。母から聞いた話では、看護師の資格に加え、さらに助産師の資格が必要なのだそうです。母も学生の頃、仙台の看護学校へ入学し、また勉強に加え、妊婦さんの看護や、出産に直接立ち会う実習など、私たちが思っている以上に、大変な看護学

校生活を送ったそうです。

何人もの人と触れ合い、その人が出産した時、喜びをわかち合えることがとてもうれしく、これからがんばっていかうという力になったと言っていました。

命が誕生する、そのすばらしい瞬間に関わり、赤ちゃんが生まれてくるためのお手伝いができるというこの仕事はとても立派で大切なことだと思えます。私も母のようにやりがいのある仕事をするために助産師になり、何事にも、一生懸命に取り組んでいきたいと思っています。

時折、妊娠した人を見たり、母から出産の話聞いたりと、立ち会った時のことを思い出します。私は以前、出産は安全なことばかりではなく、お母さんにも赤ちゃんにも、大きなリスクを伴っているということをテレビなどで見聞きしたことがあります。最近のニュースなどで、生まれたばかりの我が子をトイレや公園に捨てたり、自分の言うことをきかないからといってたたいたり、食事を何日も与えないという虐待が後を絶ちません。このような悲しいことはいまはあつてはならないことだと思います。私は将来、かけがえない命の手助けをしている、母のような助産師になりたいと思っています。助産師は大変な仕事ではあるけれど、幼い命の大切さを一人でも多くの人に分かってもらえるように努力していきたいです。そして母のように子供から尊敬されるような母親になれるよう、がんばりたいです。

作文を書くに当たって

私は小さい頃から、母が助産師として命の誕生に関わりながら働いている姿を見てきました。小さな子供達が命を落とす事件や事故が後を絶ちません。中学生になった今、自分の将来を考えた時、「母のように命を守り、新たな命の誕生に関わることのできる人になりたい。」という気持ちがより一層強くなりました。